

## 第一章

ビオレンシアという社会現象とは？

## 一 ビオレンシアの意味

コロンビアには、一八一〇年のスペインからの独立以降ビオレンシアの歴史が始まったとされるが、この歴史的な社会事実を反映して、これを研究する学問分野が社会学のなかに位置づけられている。これは、ビオレンシアの原因を分析してその予防のための政策を研究することを目的としたものであり、俗に「暴力学 (violentologia)」と呼ばれている。

それでは、ビオレンシアとはどのような社会現象を指すのであろうか。

一般的にビオレンシアという言葉は、独立した社会現象を指すものと理解されているが、社会科学として議論する場合には、貧富の格差、所得の配分の不平等といった経済構造の要因、研究者の政治的・倫理的価値観との関係および社会の発展にもなっている概念が変化・拡大する傾向などを考慮する必要がある、必ずしも一義的ではない。

しかし、本書ではこの学問的議論に立ち入ることは避け、犯罪社会学者フェルナンド・ガイタン・ダサの通説的定義である「ビオレンシアとは、その行為が厳密な生存のために

必要でないときに、道具の使用によりまたは明らかかな身体的な優位のもとにおいて、身体に損傷を与えること」(Gaitan Daza, p.184)を採用することとする。

この定義によれば、ビオレンシアとは、身体上の損傷をともしなう行為であり、無視、恐喝、非難、通行制限、人種差別などの精神的苦悩を生じさせるものは含まれない。一方、ビオレンシアには、戦争や正当な裁判手続による刑の執行が含まれることになる。コロンビアの場合は、内戦およびゲリラとの戦争（筆者注、コロンビア政府は、ゲリラを交戦団体として承認せずテロリストと位置づけているので、国内紛争という表現を使用していない）が問題となり、他方、一九九一年憲法で死刑を廃止したので、現在では死刑は問題とならない。<sup>(注)</sup>

(注) コロンビアは一八六三年憲法においていったん死刑を廃止したが、一八八六年憲法で復活させた歴史がある。

ちなみに、二〇〇二年にWHO（世界保健機関）が公表した「暴力および健康に関する世界報告」では、ビオレンシアを「自分自身、他人または集団若しくは共同体に対し、傷害、死亡、精神的損傷、発育障害または不自由を引き起こす高い蓋然性の原因となるまたはそれを有する、物理的な力または影響力を實際上または脅威として意図的に使用すること」と定義している。この定義は、前述のガイタン・ダサの定義よりも次の二点で広義で

ある。すなわち、まず自殺を明示的にバイオレンシアに含ませていることおよびバイオレンシアの性質として、身体的、性的、精神的および不作為的（または義務の懈怠）の四態様を包含していることである。

なお、自殺を取り上げてみると、コロナビアの自殺率は人口一〇万人当たり四人であるのに対して、日本の自殺率は二五・七人と極めて高いことが注目される。バイオレンシアを社会現象として把握する場合、日本人の常識的感覚からすれば、自殺を含めることには抵抗があるが、広義に解するときには自殺をも含めて研究対象となりうるという考え方は、説得力があるように思う。そういえば、学生時代に読んだエミール・デュルケムの『自殺論』は、純粹に個人的現象である自殺が、統計的に観察すると自殺の傾向それ自体が社会的現象であることを論証して、学問としての社会学の発展に大きく貢献した本であった。本書においては、ガイタン・ダサの定義を基に狭義の概念を用いることとする。そのなかで最も有意な指標であり、かつ統計として比較的信頼できるものが殺人率である。

## 二 ビオレンシアの分類

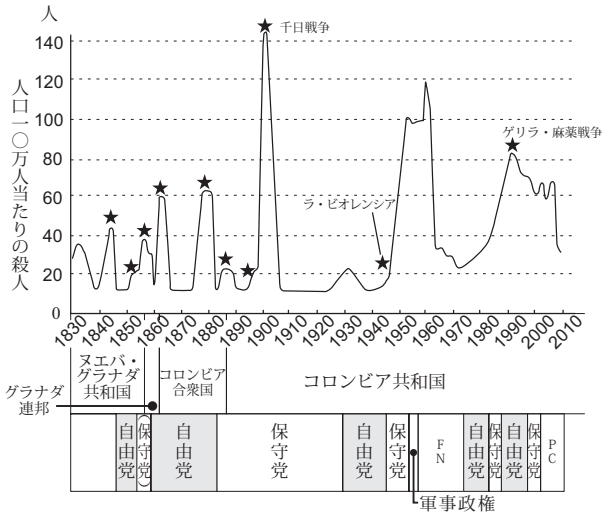
まず、次頁の図4をご覧いただきたい。

この図は、一八一九年の独立戦争勝利後、一八二九年にベネズエラが、一八三〇年にエクスアドルがそれぞれ大コロンビア共和国（後述）から離脱し、ほぼ現在のコロンビアの領土となったときから現在に至るまでの殺人率の推移を示したものである。参考までに、下段に政権政党の変遷を付記した。

これを見ると、約一八〇年間に大規模なビオレンシアが三回（一八九九年からの千日戦争、一九四八年からのラ・ビオレンシア、一九八〇年からのゲリラ・麻薬戦争）発生していること、一九世紀には中小規模の内戦が六〜七回発生していること、そして二〇世紀の前半は概ね治安状態が良好に保たれていることが観察できる。また、一九世紀の推移を見ると二大政党の交替の前後にビオレンシアが発生していることがわかる。

コロンビアの暴力学は、概ね二〇世紀半ば以降即ちラ・ビオレンシア（一九四八年以降）

図4 コロンビアの殺人率の推移と政党の変遷



出所：Gaitán Daza, Una indagación sobre las causas de la violencia en Colombia, 1995, p.213を使用して筆者が作成  
 (注)★印は、代表的な内戦の発生を示している。

と呼ばれる騒動以降については、その原因・動機の詳細な分析を行っているが、一九世紀中の内戦にともなうビオレンシアについては、ほとんど政治的要因により説明している。

そこで、本書においては、ビオレンシアを性格に応じて次のように三つに分類して、それぞれの具体的原因を究明していくことにする。第一は、一九世紀から二〇世紀中

頃までの政治的要因によるもの、第二は、政治的バイオレンシア終息後、二〇世紀後半に出現したゲリラ組織と麻薬密売組織によるゲリラ戦争および麻薬戦争に関連する要因によるもの、そして第三は、経済・社会構造や制度的要因による一般犯罪である。

なお、分析に使用する統計数字については、以下の点に注意して読む必要がある。それは、まず政治的バイオレンシアの死者数について、出所または根拠が明らかではないものや、最初に推計した著者の数字が一人歩きしているような例も見受けられることである。そのような信頼がおけない数字については、その都度注釈をつけた。次に、この種の数字推計上の困難は、例えば、千日戦争における死者数について、直接戦闘行為で戦死した人間だけなのか、戦闘行為にともなう傷害が原因となつてその後死亡した者を含むか、さらに千日戦争が与えた社会的変動による影響にともなう死者まで含むかといった問題があり、一般的に過大に評価されている傾向があるように思われることである。その理由は、バイオレンシアを扱う多くの著者の基本的立場は、そのバイオレンシアの原因となつている制度や社会構造に批判的視点を持ち、それを改革する必要性を主張するために、個々のバイオレンシアの被害規模は大きければ大きいほど説得力を持つからである。その代表的人物が、コロンビアの知識人のなかで最も影響力のあるノーベル文学賞を受賞したガブリエル・ガルシ

ア・マルケスであることを後述する。